

そんな子どもたちに救いの手を差し伸べなければならぬ。私がここでぜひ紹介したいのは、「ぐるーん」という団体だ。私もメンバーの1人だ。活動の概要は、乳児院で職員が忙しい夕方時間に施設で子どもたちを抱っこするボランティアを増やすのである。施設で育つ子どもは大人との信頼関係の絆である愛着が安定していないことが多く、それは生涯にわたって続いてしまうといわれている。そこで食事や入浴などでネコの手も借りたい時間にボランティアが入ることで、職員も助かると同時に子どもは放ったらかしにされず大人との関わりを保つことができるのである。乳児期の早い時期から子どもの愛着を築くためには、信頼できる大人の存在は絶対に必要なのである。子どもは自分の「生」を応援し支えてくれる誰かの存在が必要なのである。ボランティアは単に抱っこをするだけではなく、「ベビーマッサージ」なども行い、マッサージを通じて愛着の絆を確たるものにしよという活動もしている。

「ぐるーん」のねらいはそれだけではなく、ボランティアに参加して子どもと触れ合うことで、ボランティア側に子どもへの愛情が芽生え、それが将来的に里親にな

ることにつながることを目指す。社会的な制度の仕組みを変えるのは、相当な時間も労力もかかる。残念ながら里親も過去10年間であまり増えていない。その間にも虐待を受けている子どもは増え続けている。市民レベルでのこのような活動が広がりを見せ、それが大きな改革の渦となつて行政を動かしてくれることを願っている。

人と人の絆が希釈され、孤立して見捨てられ感を強くしている人々は他にも数多くいる。

わが子を虐待したり育児放棄する母親自身もやはり社会から孤立している。さらに人知れず孤独死する独居老人、教室で居場所のない小中学生、増加する若者の不登校や引きこもり、リストラ。例をあげればきりが無いが、その背後には年齢や性別、社会的立場とは無関係に、誰もがいとも簡単に絆を失いうる社会構造がある。

社会的弱者を救うには行政に頼るだけでなく、まず何よりも、文字通りの意味で直接的に自らの手を差し伸べ絆を回復し、そして彼らが社会や人々にとって必要とされるような仕組みを作っていくことだと思ふ。